

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02983

研究課題名(和文) 埋葬遺体の取扱いからみた縄文社会と祖先観念

研究課題名(英文) Society and perception of ancestor in the Jomon Period as seen from the deviant treatments of the dead

研究代表者

石川 健 (Ishikawa, Takeshi)

九州大学・比較社会文化研究院・学術研究員

研究者番号：40332837

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：縄文時代中期・後期の東日本出土人骨を用い、遺体の特異な取り扱いと社会の複雑性、祖先観念について研究した。遺体の特異な取り扱いとしては、その一部を離断する遺体毀損儀礼が認められ、生前の特異な職能などにより再生阻止を願って行われた儀礼と考えた。社会の複雑性については一部で階層化社会との議論があるが、墓地分析の結果からは平等な社会であることが明らかになった。

生前の特異な地位・職能によって死後の再生を恐れられ、遺体毀損儀礼を経るといふのは、階層化社会で社会的上位層が埋葬時に手厚い取り扱いを受けるような祖先観とは異なり、階層化以前の社会であるとの本研究の結果と整合性を持つものである。

研究成果の概要(英文)：This study focused on deviant treatments of the dead using skeletal remains of the Jomon Period in eastern Japan. The social complexity is also estimated by cemetery analysis and tooth crown measurements for evaluating the atypical burials. Arrangement of human bones in grave revealed post-mortem disarticulation of the dead. This unusual treatment of body might be caused by the fear of rebirth of the dead and also be a result of social persona of his/her living time but not unusual death as suicide and accidental death. The social complexity was estimated to be relatively egalitarian but not stratified during the Middle and the Late Jomon periods. Fear of rebirth of specific individual who has unusual social persona caused the deviant disarticulation of the body and other atypical mortuary treatments. This unusual treatment indicated these individuals were negatively treated in the funerary context not as specific person in the stratified society seen in ethnographic resources.

研究分野：骨考古学、先史学

キーワード：遺体の取扱い 特異な埋葬 遺体毀損 断体儀礼 縄文社会 祖先観 先史社会複雑性 人骨

1. 研究開始当初の背景

人類学における儀礼研究では葬送儀礼における分離から再統合までの過程と、埋葬後の遺体の腐朽過程とが関連する事例が民族誌などにおいて認められる。儀礼の過程に注目すると、遺体の腐朽がほとんど進行していない段階で遺体に毀損行為を加える場合と、軟部組織の腐朽がほぼ完了した人骨を二次的に動かす行為では、死者に対する葬送行為者の持つ祖先観念に相違がみられる。前者は死者の再生・死霊を恐れその阻止を願った儀礼である可能性が高く、後者は死者の祖霊への統合などを意味する場合が認められる。

一方、社会の複雑性と被葬者の取り扱いの関係については、社会の階層化に伴い他とは異なる遺体の取り扱いを行う事例が民族誌などで散見される (Sahlins 1958)。このような事例を参考としつつ、縄文時代における特異な遺体の取り扱いと社会の複雑性の関係について検討することができる。

遺体の取り扱いに関する検討に際して重要となる遺体の腐朽過程は、骨考古学的アプローチによって、人骨出土状況に基づきある程度推定することができる。さらにこの遺体腐朽過程の問題は、法医学やタフォノミーに関する分野で研究が進んでいる。これらの研究成果を批判的に導入することによって、遺体腐朽過程全体の中での儀礼的遺体処置に関する研究をより客観的に行うことができる。

西日本では縄文時代から古墳時代まで通時的にこのような特異な遺体毀損行為を伴う儀礼行為が散見され、その性格についての研究が行われている。一方、東日本では、古墳時代の埋葬事例でこのような遺体毀損を伴う儀礼が認められる。しかし、縄文時代についてはこのような観点からの研究は、一部を除きほとんど認められない (石川 2014)。

また、歯冠計測値による同一墓地内の被葬者の血縁の関係についての推定は、墓地が血縁者によって構成されるのか、あるいはそうではなくより血縁的に遠い関係の被葬者が埋葬されているのかということを判断するのに有効な手法である (田中 2008)。このような手法も合わせて援用することで、墓地の性格を判断することができ、また、社会の複雑性に関する検討も可能となる。その結果を踏まえ、上記の遺体の特異な取り扱いが行われる被葬者がどういった墓地、墓地内のどのような場所に埋葬されているのかを考古学的に分析することで、特異な取り扱いを受ける被葬者像を復元することができる。

2. 研究の目的

東日本縄文時代出土人骨を用い、

(1) 埋葬遺体の取り扱い、特に人骨の特異な出土状況からみた葬送儀礼の復元し、(2) 墓地の考古学的分析によって特異な埋葬を他の一般的葬法全般と対比し、(3) 歯冠計測に基づく墓地の性格、被葬者構成の復元を

行う。このような諸分析に基づき、縄文社会の複雑性と特質、祖先観念について明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 特異な遺体の取り扱いに関して、遺跡出土人骨についてその出土状況を調査時の写真および原図をデジタル化し、詳細な検討を行う。

(2) 考古学的墓地分析を行うにあたり、特異な取り扱いを受けた埋葬事例を、その他の通常の埋葬との対比で空間的、その他の埋葬属性のなかで包括的に位置付ける分析を行う。このことによって、特異な埋葬を、個別特殊事例として扱うのではなく、往時の埋葬行為全般の中で位置付けることが可能となる。

(3) 墓地の性格についての検討を可能な場合には歯冠計測値を用いた分析によって行う。この分析によって血縁原理が主たる墓地の形成原理であるのかどうかを判断することができる。そして民族誌などに基づく社会の階層化過程についてのモデルを構築し、それとの対比で社会の複雑性についての検討を行う。また、このような墓地の性格についての分析検討によって特異な取り扱いを受けた被葬者について、それら被葬者が何らかの社会的選択を経た人物であるのかどうかを判定することができる可能性がある。

4. 研究成果

(1) 特異な遺体の取り扱いに関しての検討
遺跡出土古人骨の出土状況・頭位方向・埋葬姿勢などと墓地での埋葬場所の検討を行った。その結果、中期の廃屋墓の埋葬においては、軟部組織が遺存した状態で遺体の一部を離断するといった遺体毀損を被った被葬者がみられた。さらにこのような被葬者の一部は埋葬姿勢や頭位方向においても通常の取り扱いを受けていないといった事例が認められた。

こういった特異な処置を受けた被葬者は、埋葬場所では他の被葬者と異なるところが認められないことから、特異な死によって遺体毀損を含む特異な取り扱いを受けたのではなく、生前の特殊な社会的地位や職能などのため、再生阻止を願って執り行われた可能性が高いものと考えた。

(2) 社会の複雑性についての検討

縄文時代中期の社会の複雑性に関しては、中期の遺跡出土人骨の資料的条件のため歯冠計測値による被葬者の血縁関係についての検討を行えなかった。しかし、関東地方の廃屋墓の様相からは、1集落内に居住する複数のリニージなどの分節単位間で顕著な格差が認められるような状況ではなく、各リニージでそれぞれ一部の死者を廃屋に選択的に埋葬している可能性が高い。このような墓地形成の様相は、居住集団間での格差が顕在化しておらず、むしろ集落内に居住する複

数の氏族集団の分節が共同で代表者を各分節単位の居住エリア内に埋葬しているものと考えることができる。

一方、後期の関東地方の一部の遺跡出土人骨について歯冠計測を用いた分析を行った。その結果、被葬者群が高い血縁関係を持っているとは言い難い遺跡が認められた。このような墓地の性格について、民族誌などを用いて構築した社会の複雑性と階層化に関するモデルと対比した。その結果、一部の墓地は複数氏族から選抜された被葬者が一墓地に埋葬される、いわば複数氏族が共同で墓地を運営する社会であることが明らかになった。すなわち、当該時期の東日本は社会の垂直的区分が顕著な階層化した社会ではなく、むしろ氏族間格差の顕在化していない比較的平等な社会である点を明らかにした。

(3) 社会の複雑性と祖先観について

一部の被葬者で見られた遺体毀損に代表される再生阻止儀礼が生前の社会的地位や職能によるものである可能性が高いことから、当時の祖先観としては、特異な社会的職能を保持していた人物が、死後の再生を恐れられるような扱いを受けているものと考えた。

このような様相は、階層化社会で社会的に地位の高い人物が埋葬に際し手厚い取り扱いを受けるなど民族誌で認められるような様相とは異なり、縄文時代中期および後期は垂直的な社会の複雑性は顕著でなく、比較的平等な社会であるとの研究結果とも整合性を持つものであると推察できる。

ただし、分析に用いることのできた資料は限られたものであることから、今後継続的に同様の研究を行なっていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

石川健、埋葬遺体の特異な取り扱いからみた縄文墓制について、考古学ジャーナル、査読有、702号、2017、pp.30-32

石川健、論文展望 民族誌的類推の運用と縄文社会復元、季刊考古学、査読無、139号、2017、p.107

〔学会発表〕(計 3 件)

Ishikawa Takeshi, Treatments of the dead in funerary context: Ritual disarticulation in prehistory of archipelago, Annual Meeting of European Association of Archaeologists 2017

Ishikawa Takeshi, Visualised denial of rebirth of the dead in the mortuary process: Ritual disarticulation during the Middle Jomon Period in Japan,

Theoretical Archaeology Group 2016 in Southampton, 2016

Ishikawa Takeshi, Visualised denial of social identity in the mortuary process: Deviant burials during the Middle Jomon Period, Japan. Theoretical Archaeology Group 2016 in Southampton, 2016

〔図書〕(計 2 件)

田中良之先生追悼論文集編集委員会編、石川健、中国書店、田中良之先生追悼論文集 考古学は科学か?、2016、1200

B. Scott, Tracy K. Betsinger, and Anastasia Tsaliki (Editors), Takeshi Ishikawa, The University Press of Florida, A Bioarchaeological Perspective of Atypical Mortuary Practices: A Geographic and Temporal Investigation. 300, 近刊予定

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
石川 健 (ISHIKAWA Takeshi)

研究者番号: 40332837
九州大学・比較社会文化研究院・学術研究員

(2) 研究分担者
()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()